

市民プレス

2017年
(平成29年)
7月5日
第77号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(3)4815502
〒353-0004
埼玉県志木市本町2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com



市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN

http://shimin.camelianet.com

「市民プレス」電子版(無料)を公開しました

http://pr-shimin.camelianet.com

電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
武蔵野台地の小さな街の記憶 その五
引又宿から志木町へ、そしてベッタタウンの志木市へ
「会所」のその後、「星野半右衛門日記」は語る
- PAGE 2
その後星野家では・・・酒造業が盛んだった引又
明治35年の「埼玉商業便覧」によると・・・
=日本の歴史と志木の歴史・年表=
- PAGE 3
田子山富士の誕生 「お胎内」を発見した人・・・
築造に関わる話題・・・
「朝日屋」の創業 日本橋本町との繋がりが
- PAGE 4
敷島神社の創建 東武東上線の開通
半ちゃんのチラシ 東京駅が完成したのは12月
志木市に電灯がつく、また電話が開通した

引又宿から志木町へ、そしてベッタタウンの志木市へ
商業は繁栄したが・・・

この日記には身の回りに起こった日常生活なども詳細に記されているので、当時を偲ぶ貴重な資料として、志木市の「指定文化財」に指定された。

五・一 「引又宿」の「会所」

弘化四年(1847)に、二十二才で星野家に迎えられた養嗣子は半平(星野家二代目)と名乗り、引又宿の名主役を継いだ。江戸時代には自治集会所があつて、そのころ、星野家の屋敷は「会所」と呼ばれ、近隣の人々の良きコミュニケーション・センターとして機能していた。

武蔵野台地の小さな街の記憶 その五

半平は、地域の紛争を調停することに優れた手腕を発揮し、名主を辞めた後も地区内の多くのトラブルを仲裁し、解決した。知識人の半平が、まちの情報通として残したものは、

五・二 「星野半右衛門日記」・・・

幕末のころ、彼は品川の御台場まで船に乗って視察に出掛け、現・板橋区、高島平で行われた役人の大砲の演習を見学した。明治維新の時代となって、ペリーの率いる黒船の来航、川越藩から浦賀への出動、各大名による防備固め、黒船の浦賀沖からの退去などについて多くの見聞を得て、日記に詳しく記録した。半平は襲名して半右衛門と称したので、「星野半右衛門日記」と呼ばれる。

その後、間もなく亡くなり、跡地には、「警察署」が置かれた。地主となった原林吉は、「朝日屋」(業)の建物の建設に取り掛かり、明治四十五年に完工した。

その後、林三によって増築された別棟などを含む七件は、平成十五年、「登録文化財」として官報に公示され、文化庁から「登録証」が交付された(本紙の「かわら版」)。時代は戻って、「会所」江戸行について、

五・五 半右衛門日記に記されているのは・・・

彼が青年期・壮年期を送った嘉永から安政にかけて、身の回りで行った出来事である。今に残されたのは、嘉永五年(1828)〜安政二年(1849)、同四年(1851)、及び明治八年、同十一年〜十三年の部分についてである。

彼の生い立ち、文政八年(1825)、白子宿(現・和光市)の名家富沢家の次男に生まれ、星野家に養子に入り、二十二才で名主役を務めたことになったのである。引又宿の政治に重きをなす一方で、農業、地主、質屋経営、寺子屋経営等をも行い、引又の経済の一翼を担う人物だった。日記には、彼の眼に映った事柄が克明に記されているので、志木地域で幕末の様子を知る貴重な史料となった。

「星野半右衛門日記」



www.city.shiki.lg.jp

「早舟」又は「早船」にてと書かれているが、気楽に江戸との行き来

ができるのはこの早舟のお陰では、と考えられる。新河岸川の舟運が乗客を運ぶようになったのは天保年間からと言われ、この時期、早舟は夜に引又を出て、翌朝、江戸に着いており、新河岸(現・川越市)を出発して途中の引又等で客を乗降させながら川を下っていった。江戸から帰る便も徹夜で運行され、朝には引又に着いていた。また、深夜、引又に到着する便もあつたようだ。

○翌十二日、明七つ半より八百八殿方にて待ち居り候処、朝四つ時新河岸早船にてお春どの下女共兩人乗来たり候間取押え、食事等いたし、杜氏は宿元へ知らず為として引又へ遣し。お春殿・下女・我ら・作次郎都合四人八百八殿方より屋根舟に乗り日本橋迄行、此の舟賃金壹分外に酒代式百文遣し(高額で、半右衛門は、奮発したようだ)。但し江戸橋より上り室町伊勢屋四郎兵衛殿(友人か取引先か。住所は室町三丁目。日本橋、番の中心街)へ立寄り、それより馬喰町式丁目武蔵屋仁兵衛と申す旅籠屋へ行き泊り。

家出したお春さんは、この事件の一年半後に、半右衛門の仲人で結婚したのであるが、ほぼ二年後には、また星野家のお世話になる。お春さんの不義事件・・・

○安政四年(1853)一月十三日、三上伊太郎女房は義、不儀の始末之有り、今夜早舟にて江戸表へ遣し、但し我ら母同道にて行。御老中堀田様御屋敷へ奉公に上候。

三上伊太郎の女房お春が不義事件を起して所払いになり、お春を江戸の奉公先に連れて行くのが半右衛門の役目だった。老中堀田様とは、駐日米國総領事のハリスに修好通商条約を突き付けられて四苦八苦したあの堀田正睦で、彼が条約の勅許を得る為に上洛する

冒頭の記事、『志木町の紛糾』と題する部分が紹介されている。照二はついに自身の居室を引払って政治から離れ、自宅の裏手に転居した。明治三十五年の「埼玉商業便覧」によると、巡查部長、派出所、その隣りに魚屋さんの植木平吉(富士通の角地に移転された「魚平」さん)と記されている。先祖父代々続いた「会所」の建物は無(左に示した図表)中央を野火止用水が流れる、現本町三丁目「市場通り」、バス停の「富士道」と「市場坂上」間を参照。

屋敷全体の土地を手放すことになつて、明治三十九年(1906)、原林吉と売買の契約が行われる(同地に現在の「朝日屋原業局」が建設されたことはすでに述べた)。「五四」を参照。その間の明治四十三年初頭に照二は死去したので、同居していた娘、その婿、子供達は、志木から転出したようだ。しかし、それが何時だったか、などは不明である。なお、「かつての志木を語る」と題する座談会(本紙三十六号へ

「郷土志木」、「しきふるさと史話」、「志木市郷土誌」が上梓された・・・

昭和四十七年(1972)、「志木市郷土史研究会」の創立総会で、井田四郎は会長として推挙された。会長の井田は、自ら、「新河岸川舟運」を寄稿して、論文誌の「郷土志木」が創刊された。間もなく、井田は病いに倒れたが、研究会の運営は、関係者に委ねられ、特に、本会発起人代表の神山秀三郎は、その従弟に当たる神山健吉を擁して、事業の確立に努めた。祖先が築いた歴史を後世に残したいという熱意はさらに強化され、現在、会長を務めるのは、文化財保護委員長の井上国夫で、昨、平成二十八年、60頁の「郷土志木」第45号を発刊している。昭和五十三年(1978)、教育委員会編纂により、「志木市郷土誌」が発行された。さらに、平成六年(1994)、同委員会は、「しきふるさと史話」を発刊した。同書は、平成三年九月から、同六年まで、東京新聞に連載されて、好評を得た。「新河岸河畔にいしえ話」(執筆したのは、文化財保護委員長の神山健吉、同委員長井上国夫、同委員の高橋長次)を纏めたものである。以下、これらの書籍に準拠して、志木の酒造り、田子山富士と敷島神社の創建、東上線の開通などの事項を記述することにした。

五・七 酒造業が盛んだった引又戦争中でも三軒が営業していた

現在の志木市の中核部分を占める本町地区(明治七年以前の引又では、酒造に好適な硬水が豊富に得られ、素材としての米を精白する水車が宝暦十年(1760)以後、何軒も地元で開業したこと、製品の酒を消費地の江戸に出荷することのために、早い時期から酒造が行われていた。確かな資料によつて裏付けされるのは、元禄十四年(1701)である。その頃、引又の二軒のほか、親村に当る館村にも二軒あつたが、何れも村役人を務める良き家柄による酒作りだった。ところが、館村からは酒造業者が姿を消し、条件に恵まれた引又に集中していった。その数は天明五年(1825)に四軒、天保十四年(1843)には六軒と増えていった。もつとも、営業としては順調ではなかつたようで、経営者が代々代わつていく。しかし、酒造株の譲渡はそれほど簡単ではなく、譲渡が正式に承認されるまでに時間を要し、その間、他人名義で醸造していた様子も窺える。

なかには、所沢在住の酒造業者が営業不振の引又の同業者の元に転居してきて営業を始めるというケースも見られた。

酒造石高は天保十四年当時、六軒の合計が千五百十八石の鑑札を得ていたが、慶応二年(1866)の米価高騰に当たり、関八州の酒造業者が一律四分の三に生産制限を課せられた際、引又地区も例外ではあり得ず、三百九十二石にまで減らされている。

その後、明治初年には一軒減つて五軒となり、明治二十年代には西山鉄五郎、三上健次郎、佐藤又七、平野定吉の四軒、明治末期には佐藤が廃業したが、残りの三軒は酒造業者の統廃合が行われた太平洋戦争ころまで営業を続けた。

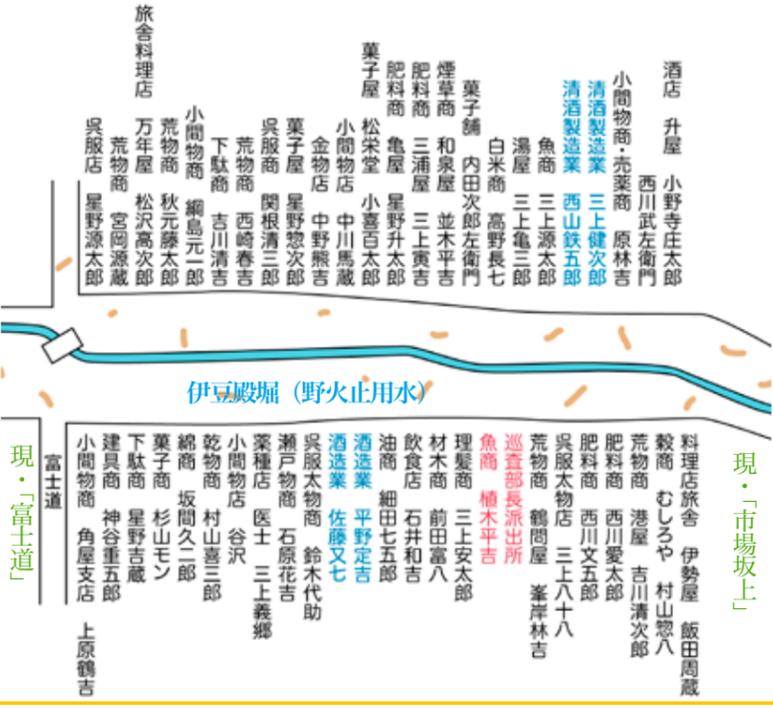
なお、明治中期ころに操業していた四軒の酒の銘柄は、西山家が「花姿」(後に「国柱」)、三上家は「狸々舞」(後に「伊佐川」)、佐藤家は「正吉」、平野家は「喜代泉」だった。なお、西山鉄五郎は明治三十年から十八

「日本の歴史と」

志木市の歴史

- 1810 文化七文政
- 1818 文政
- 1830 天保
- 1841 弘化
- 1843 嘉永
- 1854 安政
- 1860 万延
- 1861 文久
- 1864 元治
- 1865 慶応
- 1868 明治
- 1900 1900
- 1912 大正
- 1926 昭和
- 1989 平成

元号	西暦	出来事
1800	1804	文化
1810	1818	文政
1830	1830	天保
1841	1841	弘化
1843	1843	嘉永
1854	1854	安政
1860	1860	万延
1861	1861	文久
1864	1864	元治
1865	1865	慶応
1868	1868	明治
1900	1900	1900
1912	1912	大正
1926	1926	昭和
1989	1989	平成



- 現・「市場坂上」
- 料理店 伊勢屋 飯田周蔵
 - 飲食店 丸屋 村山惣八
 - 酒屋 港屋 吉川清次郎
 - 肥料商 西川愛太郎
 - 肥料商 西川文五郎
 - 呉服店 鶴岡屋 三上八十八
 - 呉服店 鶴岡屋 峯岸林吉
 - 巡査部長派出所 植木平吉
 - 理髪商 三上安太郎
 - 木商 前田富八
 - 飲食店 石井和吉
 - 油商 細田七五郎
 - 酒造業 平野定吉
 - 酒造業 佐藤又七
 - 呉服店 鈴木代助
 - 酒造業 石原花吉
 - 酒造業 三上義郷
 - 小間物店 谷沢
 - 乾物商 村山三郎
 - 綿子商 坂山三郎
 - 綿子商 杉山三郎
 - 下駄商 星野吉蔵
 - 下駄商 星野吉蔵
 - 建具商 神谷重五郎
 - 小間物店 角屋支店
 - 上原鶴吉
- 現・「富士道」
- 旅館 小野寺庄太郎
 - 小間物店 元葉商 原林吉
 - 清酒製造業 三上健次郎
 - 清酒製造業 西山鉄五郎
 - 魚商 三上源太郎
 - 湯屋 三上三郎
 - 湯屋 三上三郎
 - 白米商 高野長七
 - 菓子舗 内田次郎左衛門
 - 煙草商 和泉屋 並木平吉
 - 肥料商 三浦屋 三上実吉
 - 肥料商 亀屋 星野升太郎
 - 菓子屋 松栄堂 小喜百太郎
 - 小間物店 中野熊吉
 - 金物店 中野熊吉
 - 菓子屋 星野惣次郎
 - 呉服店 関根清三郎
 - 荒物商 西崎春吉
 - 下駄商 吉川清吉
 - 小間物店 綱島元郎
 - 荒物商 秋元藤太郎
 - 万年屋 松沢高次郎
 - 荒物商 宮岡源蔵
 - 呉服店 星野源太郎



● 昭和二十四年三月三十一日 町立志木商業学校が廃止され、ここに志木中学校が移る

● 日本レジャーメカが柏町に創業・市場の野火止用水が暗渠となり、道路が拡幅・志木駅が改築され橋上駅舎となる・市制が施行されて志木市となる・志木市役所新庁舎が落成する 志木駅北口・ショッピングタウン(タイエー)完成

五十三 敷島神社の創建

志木の夏祭りの神輿渡御は、東上沿線随一を誇る。「二之宮」「二之島神社」が本町二丁目創建されたのは、明治四十一年のことである。それ以前は同地に浅間神社があり、田子山塚の頂上に建立されていた板碑を御神体としていたことが、天保十四年(1843)の「明細帳」に認められている。

明治二十二年の町村制施行で、志木宿は「志木町」となったものの、鎮守社は一貫して館ノ水川神社であったから、農耕生活に依存する館地区と、商いを主体とする町場引又地区とは自ずと生活様式も異なり、祭りの執行などについても何かと辻褃が合わず、前項でも述べたように、互いに協調することは難しかった。

しかし、明治新政府による神仏分離に起因してか、急増する神社に音をあげた政府は、神社の合併を勧奨する通達を発したのである。これを機として、引又地区では、館ノ水川社とは別離し、浅間社を主神、星野稲荷(現・本町二丁目)に再建されているが、村山稲荷(現・本町二丁目)と水神社とを合祀して、明治四十一年に新鎮守社を創建した。

但し、新鎮守社の命名では多くの意見が出て、困難が伴った。従来浅間社名に固執する者、地形からの旭日神社説を主張する者、大和魂や大和撫子の大和民族固有の精神をあげる大和神社説、さらには日本国の別称である敷島神社説など、互いに自説を主張するあまり、決闘も辞さぬほどの険悪な状態であったという。

そこで智者が提案した。それぞれの意見を包含するには、江戸中期の国学の泰斗、本居宣長の詠んだ「敷島の和心を人問わば、朝日は、東武鉄道株式会社・社長根津

に句う山桜花」の和歌が良いのでは無いか。何故なら、敷島・大和・朝日・桜花が含まれていること、しかもこの社の主神は祭神が木花開耶姫であり、桜花にふさわしいし、各説が織り込まれていて、いずれの説に片と上州とを結ぶ意という。この創立総会には、志木町からも発起人が参加したが、配布された資料の株主申込み者として、井下田慶十郎、西川武十郎、西山鉄五郎、西川利三郎、中野金次郎、三上権兵衛らの名が

五十四 東武東上線の開通

大正三年(1914)五月二日、池袋駅、田面沢駅(現・川越市駅)間、池袋駅と、商いを主体とする町場朝霞(現・志木、鶴瀬、上福岡、川越)の回漕問屋を運営していた井下田慶十郎、田母沢の九郎、一田家では、明治十四年、弱冠十六歳の慶十郎が、隠居した父の後を継いで、所要時間は二時間二十分、志木池袋間の所要時間は上りと下りとで多少の差異があったが、44分と48分だった。

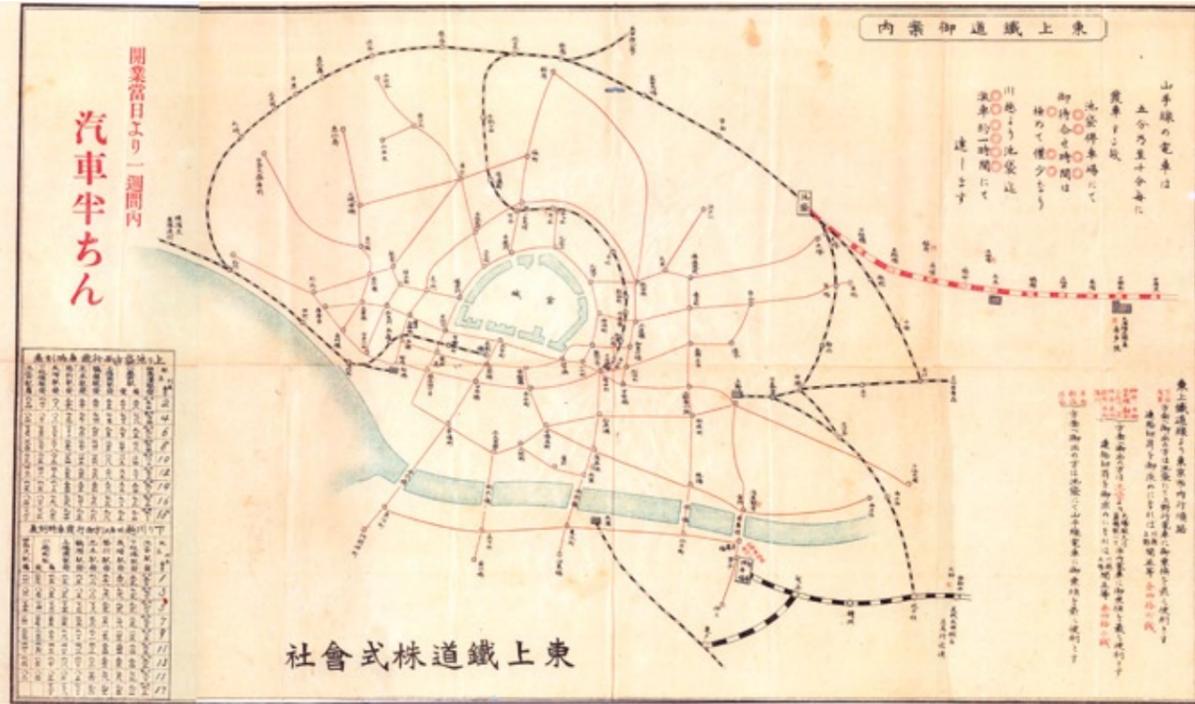
『志木市郷土誌』に従って、詳細を、以下に記すことにしたい。

東海道線の新橋・横浜間が開通したのは、明治五年のことであるが、鉄道敷設は盛んになる。同十六年、上野―熊谷間に高崎線が開通し、明治十八年には東北本線の一端が敷設されて、埼玉県内に通過する鉄道の道が開通、明治新政府の興業政策が年を追って民間に浸透し、明治二十八年、西武鉄道会社が川越鉄道を川越―国分寺間に開設したのを始めとして、多数の路線の開設が計画されたが、いずれも実現には至らなかった。

東武鉄道株式会社の東武線が開通した四年後の明治三十六年、東上鉄道の開設が政府に申請された。この路線は、東武池袋―上板橋―練馬―白子―藤折―大和田―竹間―大井―川越を経て、松山から、渋川(現・群馬県)へと、全長七四哩に及ぶものだった。最終的に、東武鉄道株式会社・社長根津

特筆すべき井下田慶十郎の活躍

すでに本紙前号で述べたように、明暦二年(1656)の開業以来、引又河岸の回漕問屋を運営していた井下田家では、明治十四年、弱冠十六歳の慶十郎が、隠居した父の後を継いで、陸上交通の発達に繁栄を齎すことを自覚し、進んで鉄道敷設の発起人として参画したよう



電化された大正時代初期の絵葉書(左側版で、「志木町市中其一」)市場坂上から現・上町方向を望む

伊豆殿堀が流れ、左手前は、料亭の「角方」、続いて西川本家(現・西川医院)、用水の傍に「火の見櫓」が立つ



長七・村山惣重・三上徳五郎らの寄付によって充当された。さらに、新道に沿って、有志の寄付によって二百六十八株の吉野桜が植栽され、後に、「志木のトンネル桜」と呼ばれ、名所となる。駅前には井下田慶十郎が鉄道輸送の貨物を取り扱う丸通運送店を開業、続いて高須五郎が開店した。

開業の当日より一週間は...

「汽車半ちゃん」のチラシ(上図)が配布された。その路線図を眺めると、未だ東京駅は無い。後に、現在の東京駅が完成したのは、同年十二月のことである。また、現在の池袋駅を通過する「山手線」が環状運転を開始したのは、大正十四年だった。

東上鉄道は、その後、第二期工事としての田面沢―坂戸間が大正五年に開通、同九年四月、東武鉄道株式会社との合併によって、名称が「東武鉄道東上線」と改まり、大正十二年、坂戸―松山間、および松山―小川間が開通した。最終的に、小川―寄居間が完成したのは大正十四年のことである。池袋―寄居間、全長75キロの東上線が全通した。

昭和に入ってから、支線として越生―坂戸間の鉄道が設けられ、池袋―川越間が電化されたのは昭和四年、池袋―志木間の複線化は昭和二十九年十二月のことである。

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。
TEL 090 (3048) 5502
編集部原宛にどうぞ